



# コレクティブインパクトの視点から見た若者UPプロジェクト コレクティブインパクトを実現するために重要な5つのポイント

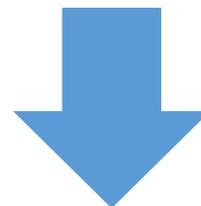
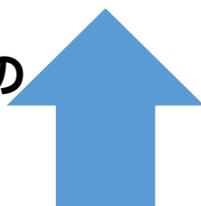
## ④ 定期的なコミュニケーション



### 【組織TOP、裁量権者によるコミュニケーション】

- ・プロジェクトのビジョン・目的の確認
- ・目的に対する現状の確認
- ・課題と対応方針の検討

取り組み状況、現場からの  
フィードバック等の報告



課題と対応  
方針の伝達



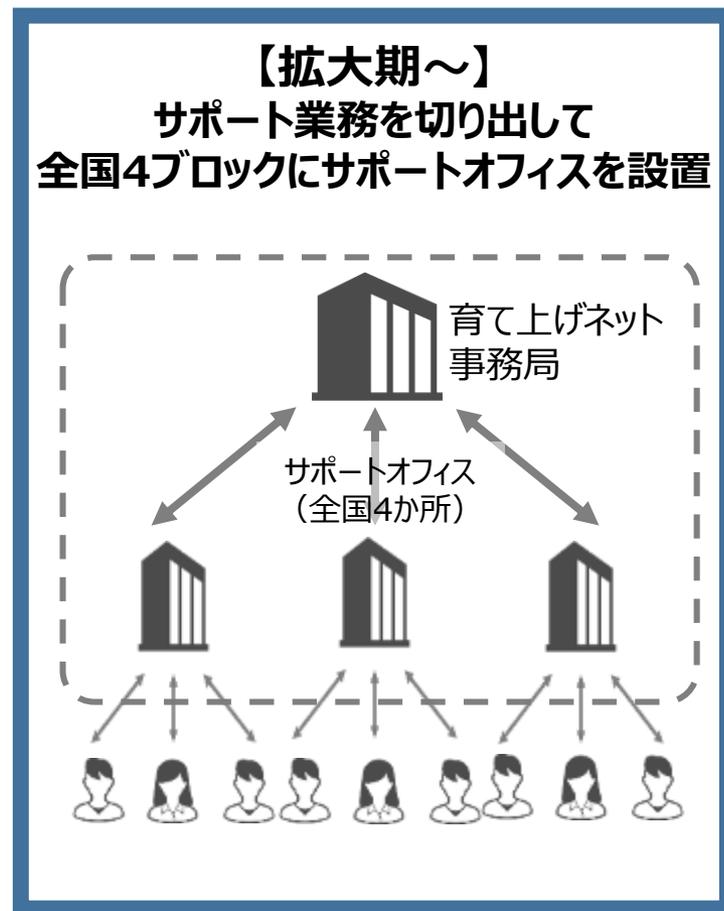
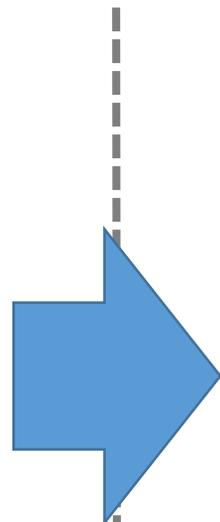
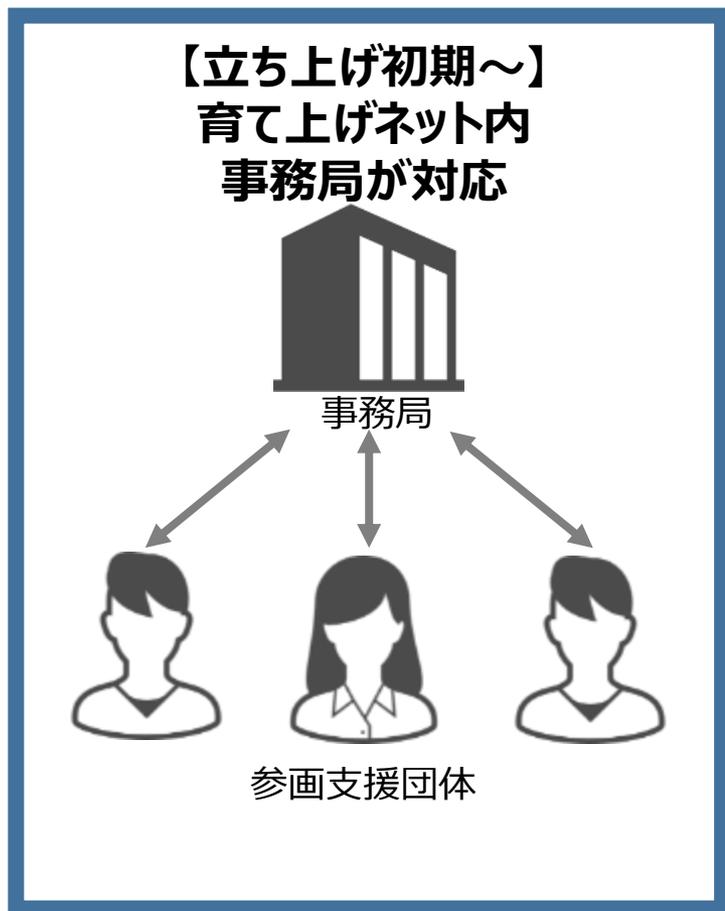
### 【現場・実務担当者によるコミュニケーション】

- ・ビジョン・目的の確認
- ・課題のアクションへの落とし込み
- ・活動推進状況の共有ととりまとめ



# コレクティブインパクトの視点から見た若者UPプロジェクト コレクティブインパクトを実現するために重要な5つのポイント

## ⑤「支柱」となるサポート



20団体  
前後

# 事務局の役割

## 【対MS社】

- 若者支援機関のニーズの集約と伝達
- 若者UPプロジェクト向けの教材、プログラム内容作成時のサポート
- プロジェクトの進捗状況、成果等のとりまとめと報告

## 【対若者支援機関】

- 講師育成時のサポート
- IT講習の実施に関するノウハウ集約とシェア
- 現場のトラブルシューティング、相談対応

## 【自治体・公共機関・その他の民間企業】

- 事業推進上の調整

## 若者UPプロジェクトの全体像

# 立ち上げから政策化までの4つのフェイズと主な論点

### Phase.1 構想段階

- ✓ 若者UPプロジェクト立ち上げの背景・経緯
- ✓ MS社と育て上げネット協働のきっかけ
- ✓ プロジェクトのゴールイメージ

### Phase.2 プロジェクト 初期

- ✓ 初期メンバーの顔触れと参加の背景
- ✓ MS・育て上げ・参加団体間の役割分担
- ✓ プレーヤー間のコミュニケーションの方法

### Phase.3 プロジェクト 拡大期

- ✓ 参加団体を増やすための働きかけ
- ✓ 参加団体が増えたことに対応するための体制の変化

### Phase.4 スケールアウト (政策化)

- ✓ 行政の視点から見たときの若者UPプロジェクトの評価
- ✓ 若者UPプロジェクトを継承することになった決め手
- ✓ 承継後も成果を上げ続けるために必要な取り組み

- 「若者UPが構想されたのはいつ？」  
→2009年にMS社の龍治部長と育て上げ工藤理事長が意見交換したのがきっかけ
- 「MSと育て上げネットが協働するきっかけは何だったのでしょうか？」  
→両者の利害の一致（＝MSは対象者との接点、育て上げは自立につながる有効なコンテンツを求めている）
- 「当初はプロジェクトのゴールイメージをどこにおいていたのか？成果をどのように測るのかといった観点は持っていたのでしょうか？」  
→当初から成果イメージのすり合わせを行っていた（PCスキルを伸ばし、就業の可能性を広げる）

- 「取り組み当初に5団体で始めた時、各プレイヤー（MS・育て上げネット・支援団体）の役割分担は明確だったのでしょうか？」
  - 相当程度明確（前提として、各参画機関が何ができるか、できないかのコンセンサスを十分にとっていたため）
- 「成果が拳がってくるにつれて、参加事業者も増えていくわけですが、どのように意思疎通を図っていたのですか？」
  - トップと実務レベルの2層のコミュニケーションを密に取っていた（場合によっては事務局スタッフを現地に派遣）
- 現場で、プログラムを提供するときに大変だったことって何ですか？
  - 支援者のスキル習得、「支援者＝講師」の認識の浸透

- 「全国40か所に展開していくことで、実務的な負担がさらに増えていったのではないのでしょうか？どのように対処していったのですか？」

→事務局機能の強化

- 「当初5団体でやっていた取り組みが40か所に拡大していく中で、ミッションやKGI、役割分担といった部分で変わったことはあったのでしょうか？」

→基本的には変わっていないが、プロジェクトへの参画度合いには柔軟性が担保されている（プログラムは利用するが、SROIはやらない等）

- 「厚生労働省とのやり取りはいつ頃から、どのように行っていたのでしょうか。」  
→ごく初期から厚労省へのインプットを定期的に行っていた
- 「厚労省は若者UPをどのように評価していたのでしょうか。また、政策として引き継ぐことになった決め手はなんだったと思いますか？」  
→プロジェクト自体がサポステでの導入をある程度意識しており、成果指標などはそのまま受け継がれやすい形だった
- 「政策として引き継がれた若者UPが今後も成果を上げ続けるために必要なことは何でしょうか？」  
→事務局のグリップ（投げっぱなしにしない）